哲学分野

規範性と多元性の歴史的諸相

研究班代表
内山　勝利

はじめに

内山　勝利

われわれの研究会は、現代世界の状況、とりわけ文化状況において、領域的伝統的な文化の「多様性」「多元性」とグローバリズム的「一元性」「普遍性」との相克に見られるような、両者の対立をすぐれて基本的な問題ととらえて、その本質的局面を歴史的事象に遡行して検討し、そこから本来あるべき調停の方向への示唆を得ることに努めることを課題とするものである。研究は、次のような二つの基本テーマと視点から取り組み、各メンバーはそのいずれかに重点を置きつつ、たえず両テーマの一体化・総合化を目指すことに努めている。

１）哲学知の継承と変容　哲学史の展開における幾度かのクリティカルな局面に新たな照明を当てることによって、世界の多様性の中で、哲学知がいかに変容しつつ確保されていくべきかを探る。

２）藝術作品における規範と創造　具体的・歴史的事例に即して、規範の作用と反作用の交錯の場としての創造の力学をたどりつつ、藝術活動における規範性と創造性のディアレクティカルな関係を明らかにする。

この研究会の基本的特色は、従来必ずしも活発にはなされてこなかった哲学史・思想史研究と美術史研究との連携を積極的に進めようとするところにある。上記二つの基本テーマは、それぞれ「哲学知」と「藝術作品」とを互換的に読み替えるべきことを含みとしている。思想的著作と造形作品とは、本来ともに精神史的遺産として、通底した統一的全体をなしていることは言うまでもないであろう。過去１年余における研究経過においても、すでにこの連携は大きな成果の結実とより大きな可能性の展望とをもたらつつある。

ここに収めた６篇の論文は、その一端を示すものである。われわれの研究会にゲスト参加いただいた山内志朗氏による特別寄稿を巻頭に収め、それ以下は、主として若手研究者による清新かつ意欲的な論考を収

載することとした。論文の配列は基本的にジャンル別を意識せず、時代順で一貫されている。これも、われわれの研究活動の一体性・総合性を目指す意思を示したものと解されたい。